

西宮

女性教育の場として150年の歴史を刻む西宮市の神戸女学院大（岡田山）で6日、文学部総合文化学科の開設50年を記念するフォーラム「女子大、新時代 要不要論をこえて」が開かれた。学生や教育関係者、研究者ら約120人が参加。社会で活躍する卒業生らによる座談会や教員らのトークセッションがあり、少子化や共学志向の強まりで岐路に立つ女子大の将来像を探った。

（小林良多）



在学中の経験が卒業後の歩みにどう生きたかを語る
総合文化学科の卒業生ら＝西宮市岡田山

岐路に立つ女子大将来像は 神戸女学院大、総合文化学科50周年フォーラム

同大によると、1976年から所属する約15人の少人数年に開設された同学科は、ゼミでは、探究型の学びを学問の領域を越え、物事を進めている。多角的に捉えるリベラルアーツ教育を実践。1年目から女子大として継続する方針

社会で活躍する「在学中の経験、人生を豊かに」 卒業生3人語る

を宣言。この日、中野敬一院長は冒頭のあいさつで「女子大の危機が報じられているが、女性が自信を持つて羽ばたき、能力を発揮できるような社会に問い続けることも重要な使命だ」と述べた。

座談会では、社会で活躍する30代の卒業生3人が登場。女子大から巣立ち、困難を感じなかったかを問われる、3人は「周囲が心配するほどの問題はない」と口をそろえた。

小学校から16年間、女子校で学んだという松波百合愛さん（30）は念願の放送局で働く。「学内が女性ばかりだからこそ、性別ではなく相手の人格と向き合ってきた。社会に出た今も変わらない」と説明した。

リベラルアーツ教育について、金融系企業に就職した鴨志田裕美さん（32）は「迷いながらも自分なりにアンテナを張って得た知識や経験が仕事だけでなく、人生を豊かにしてくれている」。外国人らの日本語教育に携わる藤澤絵美さん（33）は「異なる価値観と向き合う中で柔軟に役割を果たしているのは、多角的な見方を大学で身に付けられたから」と語った。

た。

ゲストで登壇した関西学院大建築学部山崎亮教授（52）は、コミュニケーションデザイナーとして活躍。住民による地域の課題解決を支援してきた経験を踏まえ、「住む人々の議論をシナリイとして良いのか。むしろ女子大通り誘導しては意味がない。ともに働く仲間は女性が多く、多様な意見が重なる場、しなやかにまとめる能力にたけている」と指摘した。

女子大の不要論に対しては「変化が求められる時代に、今までと同じように利益を追求する価値観で評価して良いのか。むしろ女子大が輩出する人材が社会の意識を変えていけるのではないか」と語った。